

小型和英辞書評価の試み

潮 昭 太 *

A Proposal for Evaluating Compact Japanese-English Dictionaries

Shota Ushio *

Received September 19, 2003

はじめに

特に大学生や比較的若いサラリーマンが辞書を選ぶ際に参考になるような標準的な評価方法を確立できないものか。すくなくとも、その試みは努力に値いするはずだ。これがこの小論の目指すものであり、提唱することである。

ただし、このテーマは大きなものであるから、たまたま2002, 2003両年に刊行された3タイトル（うち2つは改訂版）の和英辞典を対象にして評価基準のための検討をすすめた。この作業の過程で厳守したのは特に利用者の立場に立つという一点だ。辞書について論じる人々とは異なり、「典型的な」ユーザー（多くの学生）は読書とおおむね無縁であり、教師などの助言を無視・軽視して、何冊もの辞典を買いもしないし使いもしない。従って、たとえば学習用の小型和英辞典では、どの1冊が「お勧め品」であるかを、できれば高校の段階で、遅くとも大学における英作文などの授業で明らかにすることが必要になってくる、と筆者は信じている。

辞書を推薦するのに、専門誌の書評を参考にするだけでは、あまりに安易だと思う。一般に新聞や雑誌に載る、ほとんどすべての書評はよく言っても「簡潔」であり、酷評すれば時間に追われた「やっつけ仕事」である。やはり教員が自分の関心ある、従って多少の知識を有する分野を中心に辞書を実際にめくってみるのが望ましい。さらにいいのは一定の評価基準をあらかじめ定めておき、ある辞書がその基準に合うかどうかを仔細に点検していくことであるはずだ。

この小論はまったく筆者個人だけの検討に基づいているから、自ずと限界がある。しかし、基準づくりの基本的な概念をできるだけ多くの表現例とともに提示して、読者諸氏の批判を仰ぎたいと願っている。

* 外国語学部
Faculty of Foreign Languages

英語学習が目指すべきものと3タイトルの概要

ベストセラーになった岩波新書のなかで、筆者が教員として十分に同感できたのは鈴木孝夫「日本人はなぜ英語ができないか」(1999年)だった。この書名を目にして筆者は「その答は明らかだ。努力をしても、度胸が足りないから。英語表現や発音で間違いをやるのではないかと恐ろすぎるからだ」と直ちに思ったものだ。筆者のこの考えは読後も変わらない。

この新書は再読に値いする。「(省略)既に大国となってしまった日本と諸外国との間に、現在も見られる言語情報の流れの大きな不均衡が、日本のためだけでなく、世界のためにも好ましくない、一刻も早く是正される必要のある問題だ(省略)」(p.176)。鈴木はまた、「(省略)一九六四年の東京オリンピックで象徴的に代表させることができる一九六〇年代の中頃から、日本の経済はついに離陸に成功した(p.77)」とも述べる。日本の地位に比して日本から外に向けて出される情報がすくない事実と是正を呼びかける声はすくなくとも1970年代以来聞こえていた。その声のひとつである倉田保雄「ニュースの商人ロイター」(新潮選書)が出版されたのは1979年だ。

倉田の関心事は彼の通信社記者という背景を反映して、国際ニュース報道だったが、鈴木が訴えているように、英語教育の重点は1964年を境にして、十分な外向けのコミュニケーションを可能にするために、表現力を養うように大きく方向転換をすべきであったのだ。ここで筆者が念頭においているのは、官僚の入れ知恵に基づく審議会などのもっともらしい提案ではなく、鈴木が詳述しているような、教育の現場における、実質的な改革(あるいは革命と呼ぶべきだろうか)である。なお、個人的にも1964年は重要な年だった。この年、筆者は東京の私立大学を卒業して、初めてアメリカに(貨物船で)渡った。オリンピックに合わせて完成された東京―大阪間の新幹線などが米国の雑誌や新聞によって紹介されるのを目にしつつ大学院に通った事実を昨日のように思い出される。オリンピック開催年が経済大成長への第一歩だという説には、厳密な経済分析を別にして、説得力がある。

辞書に関しては、和英辞典だけが英語表現力をつけるたり、英語を使うビジネスのための道具ではない。だが、和英辞書を一切使用せずに学生が英作文を書いたり、いわゆる社会人が英文を書く場面は想像しがたい。どんな種類の文筆業に携わっていても、またたとえ時々でも文章を書く状況にあれば、辞書が必需品であるというのは「真実」だし、これが大げさな言い方であれば「事実」だろう。英語圏の詩人が*The Oxford English Dictionary*を、日本の作家が「広辞苑」をぼろぼろになるまで使ったという類の話は全然驚きではない。

この小文で取り上げるのは①三省堂編修所「グランドコンサイス和英辞典」(三省堂、2002年6月)、②Martin Collick, David P. Dutcher, 田辺宗一, 金子稔「新和英中辞典」第5版(研究社、2002年9月)、③渡邊敏郎, E. R. Skrzypczak, P. Snowden「研究社 新和英大辞典」(研究社、2003年7月)である。①はまったくの新刊である点と出版社の辞書編集部がまとめたことが特徴だ。「まえがき」には3人の英語圏出身らしい名前が列記されているが、これらの人々の役割は「英文の校閲」だと明記してある。②の第1版は1933年、第4版の刊行は「まえがき」によると「神戸の大震災が起こった1995年だった」。③の第1版は1918年に出され、直近の第4版出版は1974年だったから、ほぼ30年ぶりに大改訂が実現したことになる。「まえがき」の対抗ページに「日本語執筆」者として4人の名前が印刷されている。「まえがき」に

はこう書かれている。「作業手順としては、日本語の専門家によって採録された日本語用例の英訳を英米人執筆者のみで行い、それを日本人執筆者が元の日本語とくらべて点検し、必要な修正を英米人執筆者に求める、という方式をとることによって生硬な日本語と英語らしくない英語の排除を図りました」。

「大和英」(③)の出版史を姉妹版、竹林滋他「新英和大辞典」第6版(研究社、2002年3月)のそれと比べてみると、明らかに英和辞典にたいする一般の需要が大きいらしいと推測できる。「大英和」の第1版刊行は「大和英」よりも後の1927年であるが、敗戦後だけの改訂版出版でも今回で4度目だ。また、同じ研究社の「中辞典」シリーズでも、「英和」は2003年4月に第7版になったのに対して、「和英」のほうは先に述べたように2002年9月で第5版となり、やや遅れをとっている。

英和辞典のほうが和英辞書よりも売れていることは容易に推察できるし、実感できる。この点は表現力とそのための道具という観点に立って考えてみれば嘆かわしい。

なお、一応3つの和英辞典を比較することにしたけれども、比較的ていねいに検討するのは「大和英」を除く2つとする。先述したように、小論の主な目的が学生層を中心にする利用者のための案内となっているからだ。

評価のためのモデル

評価基準を定めてみたいということは即モデルをつくってみることを意味しよう。

モデルの中心になるのは一定の数の表現、あるいは項目だ。典型的な利用者にとって、ある種の表現が辞書に盛り込まれているかどうかは極めて重要なポイントであり、多くの場合、唯一の基準であるかもしれない。ここまでは当然の話、自明の理と言えるだろうが、いかにささやかなものであれ、モデルを実際につくる立場に立ってみると、問題は数多くあり大いに迷ってしまうことにもなる。この小論とは比較にならないほど膨大な語彙から辞書に入れるものを選ぶ辞書づくりに携わった人々の苦労や苦悩がしのばれる。

さまざまなモデルがありえる。経営学部・商学部に在籍する学生のためのものが医学部学生のためのものとまったく同じでいいわけがないし、学生のためのものが実務家のためのものと同じであるのも不自然である。筆者は先に「標準的な」評価基準にふれはしたが、すべての種類の利用者に役立つ「統一的な」基準づくりとは書いていない。

筆者が迷った後に選んだのは大学2年生程度の人々が必要にする英語表現を中心にしてモデルの語彙を選ぶことであった。具体的には、筆者が過去6年半にわたって担当してきた北陸大学の英作文の授業で学生たちが悩まされたり、苦労して書いた種の表現である。学生たちの共通点は外国語学部英米語科に在籍していることだ。ちなみに、筆者の授業やテストでは和英辞書を含むすべての種類の辞書使用を許可してきた。英語の実務に就いた人が辞書使用を許されないことはない、という単純明快な考えに基づいて決定したルールである。

まず、モデルに入れた表現の一覧表を掲げたい。

1 アニメ；2 **医局；3 一輪車；4 一匹狼；5 飲酒運転；6 うっそお；7 **裏金；8 裏目に出る；9 エッチする；10 (大学の) 演習；11 *援助交際；12 *大奥；13 お手上げ；14 オマ

ージュ；15（比喩的な）温度差；16*（新紙幣印刷）開始式；17価格破壊；18学長；19*菓子パン；20ガッツポーズ；21合併症；22上方；23カメラマン；24家老；25*（野球，映画，道路工事などの）監督；26**がんばる；27幹部；28患部；29決め手；30キャリアアップ；31*吸収合併；32行政；33業務提携；34ぎりぎりの；35銀塩フィルム；36クリプトン；37（新潮社系の作家，岩波系の学者などの）系；38固定電話；39ゴマすり；40小者（小物）；41*（客のふりをする）さくら；42座談会；43*里山；44（血液の流れが）さらさら；45*さわら（鱒）；46（政界などにおける流行語としての）三位一体；47始球式；48支給式；49自習；50執行委員会；51しどろもどろ；52シナ竹（メンマ）；53**司法書士；54じゃんけん；55*（野球の）シュート；56自律神経；57**書類送検；58資料映像；59新書版；60（「すましている」を意味する東京方言の）すかす；61*生活習慣病；62聖公会；63性善説；64責任感；65*関脇；66前立腺；67総辞職；68村長；69匠；70*玉の輿婚；71玉虫色；72*たわし；73単身赴任；74帳尻が合う；75（特にプロ野球の「勝ち越し数」を意味する）貯金；76通信社；77的；78鉄砲水；79*出戻り（娘）；80電化生活；81*天守閣；82*電柱；83店頭市場；84**土下座する；85（比喩的な）泥を塗る；86内部告発；87流し目；88中ぐり盤；89*二枚舌；90能天気な；91バジル；92**バックマージン；93話にならない；94左利き；95*日焼け止めクリーム；96*副社長；97**フリーター；98フロッピーディスク；99文庫版；100（犯罪としての）便宜供与；101補導；102ボトムアップ；103前金を払う；104マカロニウェスタン；105耳くそ；106無能；107**屋形船；108（家計を）やりくりする；109*有感地震；110羊頭狗肉；111世渡り；112*ラッキョウ；113離岸流；114理事会；115（本来の意味から離れて，「解雇する」を意味するようになった）リストラする；116令嬢；117露骨な；118六法全書；119*ロリコン；120ワイシャツ。

合計120の表現が基準モデルにふさわしい数であるかどうか，筆者に確信はない。しかし，「1アニメ」から「120ワイシャツ」まで，学生たちの必要とした語彙が変化に富むとは言えうである。大雑把に分類すると，次のようになる。

1）カタカナ語（1，9，30など）；2）組織に関わるもの（2，27，67など）；3）日常生活で見る物（3，19，35など）；4）抽象的なもの（4，13，14など）；5）犯罪（5，7，57など）；6）流行語（6，9，11など）；7）動詞（8，26，60など）；8）日本独自のもの，あるいは準日本的なもの（12，48，54など）；9）健康・身体（21，61，66など）；10）日本語では1語ですむが異なる英語表現を必要とするもの（25など）；11）ビジネス（33，96など）；12）化学（36）；13）メディア（1，23，58など）；14）環境（43）；15）スポーツ（47，75など）；16）死語に近いもの（80）。

このようにさまざまな，あるいは雑多なカテゴリーが出てくるのは学生たちが文学部ではなく外国語学部に所属している事実と英作文がごくわずかな制限・ルールしか設けない，実質的には自由英作文である点に起因していると筆者は考える。実際，家族との日常生活しかテーマにできない学生もいれば，社会批判を得意にする人もいたり，極めて少数だが短編小説や童話ふうの文章を好んで選ぶ学生もいるのだ。

英作文の目標

日本人による英作文が目指すべきものは和文を書く際の心がけと大差ない、と筆者は考えている。正確さ・分かりやすさと簡潔さが主な目標となるべきだ。この目標は「大英和」の編者たちがふれた「生硬な日本語と英語らしくない英語の排除」に近い。小説や詩の文体を別にして、日本文（あるいは新聞記事）が名文である必要はない。文章に関する基本的な考えがユニークである必要もない。

ただし、自国語と外国語を書く場合には当然ながら技術的な差があり、後者の場合に工夫の必要が生じるのは当然である。工夫のなかに和英辞書の上手な利用が含まれており、それよりも根本的な一仕事のなかに、役に立つ辞書を選ぶという作業がある。

誇張を許されるなら、辞書選びは人生における配偶者選びのように重大である。

さらに、外国人として英文を書く作業には自ずと限界がある。英語で自分の考えを80%も伝えられれば上出来だと割り切って考えないと大量の英文を書くことはできないであろう。常に100%を目指す必要はないとは言っても、時には特殊効果を狙って古語（たとえばGood-byeに代えて Fare thee well）や外国語（Sayonara, Adieu）を使いたくなるだろう。だが、「さようなら」「さらば」程度なら工夫しやすいけれども、おおむねごく自然な文体を目標にするほうが無難だ。「自然な」ということは死語・古語や逆に極端な俗語、卑語はたとえ知っていても自ら書くことは避けたいということの意味する。凝った表現を学んだ直後にはそれを使いたくなるものではあるが、作文全体のトーンを乱すような使い方はもちろん好ましくない。「読む（聞く）ための語彙」と「書く（話す）ための語彙」を区別したほうが安全であるという、ごく自然な考えを実行したい。

従って、和英辞典が口語や俗語、さらに卑語を含んでいてもいいが、特に後者の場合には注意書きがあったほうが親切だということになる。

ちなみに、筆者担当の英作文授業では最初の時間に、こう学生諸君に伝えている。「皆さんは新聞記者になったと考えてください。僕は編集長か社会部長です。皆さんの読者は日本には一度も来たことがなく、日本語を全然話せない、英語圏の人です」。ちなみに、この鉄則を採用したから、日本語由来の英語を使用することには制限を設けている。具体的には「ランダムハウス英和大辞典」第2版（小学館、1994年）の巻末にある借用語リストから、さらに選んでAkita/akita からZenまでの94語を使用可能としている。

和英辞書はどこまで似ているか？

書物としての辞書について考えると、類似点と独自性・違いが共存する点でかなり特異なものである。この点について明快な解説をしているのはSidney I. Landau: *Dictionaries The Art and Craft of Lexicography* (Cambridge University Press, 1984) である。彼は「法的な考慮」Legal Considerationsという中見出しと「剽窃とフェアな使用（引用）Plagiarism and “Fair Use” の小見出しの下にこう記す。“Dictionaries have always copied from one another, but no reputable dictionary today would take over entire sections of another work and print them verbatim, a practice common in the seventeenth century. If one makes a definition-by-

definition comparison of a number of competing dictionaries, one will find very few identical definitions apart from the short, formulaic ones of the 'of or pertaining to' variety. There are only so many ways one can define *bovine* or *reptilian*." (pp. 296–297) .

彼の指摘を念頭におきつつ、まず小論が対象にしている3タイトルの類似性を調べてみたい。なお、ここからこれらの和英辞書にしばしば言及することになるから、略称を使用する。①「グランドコンサイス」は「三省堂」を省略して単にSan, ②「新和英中辞典」は英文書名の一部, New College を短くしてKen NC, ③「大和英」は Ken Newとする。これらの他に、山田忠雄他編集の「新明解国語辞典」第5版(三省堂, 1997年)と西尾実他編集の「岩波国語辞典」第6版(岩波書店, 2000年)をそれぞれ「新明解」「岩波国語」と省略する。

最初に調べるのはモデルの120表現(**を付けたのは最重要語, *を付けたのは重要語のつもりだった)のうち、辞書に項目として選ばれなかったものである。

Sanに収められていないのは「6うっそお, 15(比喩的な)温度差, 16*(新紙幣印刷)開始式, 35銀塩フィルム, 38固定電話, 43*里山, 48支給式, 55(野球の)シュート, 77的, 80電化生活, 81*天守閣」の11表現だ。

Ken NCに出てこないのは「6うっそお, 9エッチする, 14オマージュ, 16開始式, 19*菓子パン, 30キャリアアップ, 35銀塩フィルム, 39ゴマすり, 43里山, 48支給式, 58資料映像, 59新書版, 69匠, 70*玉の輿婚, 80電化生活, 83店頭市場, 92**バックマージン, 113離岸流」の18表現である。

Ken Newが収めていないのは「16開始式, 48支給式, 52シナ竹(メンマ), 77的, 80電化生活」の5表現だ。

これらの表現のうち、「6うっそお」は利用者が「冗談だろう」という言い回しの流行語だと考えればkiddingを使って対処(和文英訳)できる。「48支給式, 80電化生活」には古都金沢で使われる用例だという共通点があり、前者が特殊な表現であり、後者が死語に近いとみなせば、辞書になくても大して困りはしない。Sanが「38固定電話, 81天守閣」などを落としているのは筆者には意外だったが、より大きな問題はSan, Ken NCともに「43里山」を落としていることだ。「新明解」もこの表現を収めていないが、「岩波国語」は「人里に接した小山」と定義し「里山の雑木林」という用例を掲げる。Ken Newはこの定義に似ているがやや詳しい表現(undeveloped [preserved] natural woodland near a populated area)を教えてくれる。

2あるいは3タイトルすべてがまったく同じ英語表現を記しているケースは意外にすくなく、「14オマージュ(homage; ただしKen Newは3フレーズを追加), 21合併症a complication (Ken Newには2文例と4フレーズ), 36クリプトンkrypton, 53**司法書士a judicial scrivener (Ken Newはcopyistを追加), 66前立腺the prostate (gland), 83店頭市場an over-the-counter market, 86内部告発a whistle-blowing, 102ボトムアップbottom-up, 104マカロニウエスタンa spaghetti western, 109*有感地震an earthquake that can be felt (ただしKen Newはすっきりしたa felt [noticeable] earthquakeとする), 120ワイシャツa shirt」の11表現である。

なお「45*さわら(鱈)」はどのような和英辞典でもまったく同じ表現になっているだろうと予想したのだが、Sanはa Spanish (spotted) mackerel, Ken NCはa Spanish mackerelだとしており、Ken Newはa Japanese Spanish mackerelとしたうえで学名を添えている

(*Scomberomorus niphonius*)。なお、英米の辞書では *The Concise Oxford Dictionary* (COD) Ninth Ed. (1995) と *Merriam-Webster's Collegiate Dictionary* (MWCD) Tenth Ed. (1998) はともに Spanish mackerel の項目を設けており、後者は ... with oval brown spots on the sides ... などと解説している。実は日本人が食べる「鯖」と英語辞典が載せる Spanish mackerel は生息地域が異なる。この事実はあるウェブ・サイト (http://kosfic.yosu.ac.kr/kos_home/ocean_gis/FAO/mapbrief.html) で確かめられる。

類似した表現は 3 タイトルのなかに実に多い。モデルで仮に重要語・最重要語としたものだけを拾ってみても、以下のような例を見て取れる。「2**医局」は San では a medical office とあり、複合語をも載せており、Ken NC は a medical office 以下、似たような説明を与える。Ken New は a doctor's office in a hospital とし、1 文例と複合語を添える。問題は、日本で大学病院の名義貸しがあばかれ、「医局解体」が唱えられるようになったことに関連して英作文を試みると、これらの英語表現が大きな助けになりえないことだ。これに比べると「7**裏金」の英語は San では簡単な扱いだが (a bribe, a slush fund に加えて 1 文例)、Ken NC は an off-the-books fund などに加えており、Ken New ではさらに充実しており、十分に役立つ。ただし、比較的できの悪い学生はどの表現を選ぶべきか、迷うであろう。

このような学生は「援交」の項目があるだろうと思いがちだから、辞書の使い方について説明する際に、「援交」を「援助交際」に、「ミンスカポリス」を「ミニスカートのポリス、つまり婦人警官か婦警」というふうに一旦和文和訳をする必要があると、面倒でも教えなければならない。さて、その「11*援助交際」はすでにいくつかの定訳ができていることが 3 タイトルからうかがえる。San がややごちなく prostitution involving high school girls and older men とするのに対して Ken NC は schoolgirl prostitution (for pocket money) ; paid (compensated) dating というずれも簡潔に記す。後者は Ken New にも収められている。なお、San のごちなさは「20ガッツポーズ」にも現れている (raise one's clenched fist(s) in triumph など)。Ken NC の英訳も似たようなものだが (raise [hold up] one's fist(s) in triumph)、「ガッツポーズ」は「和製英語」(カタカナ語) という親切な注が付いている。Ken New には 2 英文例と 4 フレーズが追加されている。

「57**書類送検」は「新明解」では「被疑者の身柄を拘束しないで、起訴すべきかどうかの判断材料として被疑者の取り調べ調書などを警察から検察庁に送ること」と定義されている。どの和英辞書もこの定義を簡潔に書き直し、訳したような印象を与える。だが、本当の簡潔さを実現できない代表例のようである。San は sending the papers pertaining to a (criminal) case to the Public Prosecutors Office とする。Ken NC は頭の部分が動詞の send となっているだけで、残りの部分は San と同文である。Ken New も書き出しが send [refer] となっているだけの相違である。「72*たわし」は San がもっとも簡単に処理しており (a scrub (bing) brush)、Ken NC はこれに a (pot) scourer; a pot cleaner を追加している。Ken New はさらに詳しく、おまけに 1 フレーズを加えたりもする。同様に「79*出戻り (娘)」でも San が簡潔というよりミスリーディングな a divorced woman としているのに対して Ken NC は a divorced woman (back at her parents' home) とややていねいで、より正確になっているし、1 文例を添えている (She is divorced and (is) living with her parents now)。ただし、San も 1 文例を加えている (The daughter is back home because she has got divorced)。Ken New は

Ken NCのこの表現にa divorceeと1フレーズを追加している。このフレーズ (returning to one's former post [team]) は「娘」ではなく「選手・会社員」などにかかわっている。

Ken NCは先にふれたように「92**バックマージン」を載せていないが、Sanのa back marginには疑問を覚える。クディラ (Francis J. Kurdyla) 「最新ビジネス和英口語辞典」(朝日出版社、1996年)はこの表現を「和製英語なので通じない」と断言している。Ken Newのように「販売後の代金割り戻し」を指すならa rebateで十分だし、やや口語的な言い回しを好んだり、犯罪の匂いがする場合にはa kickbackも使えるとしたほうが利用者に親切だ。「ビジネス和英口語」は多くの文例を載せているが、本質的にはKen Newと同じ内容である。

「95*日焼け止めクリーム」はどの和英辞書でも同じ訳語だろうと予想していた。だが、Sanはanti-suntan creamとしており、Ken NCはsun-screen; sun blockを掲げ、Ken Newは(a) sun block [sunblock] cream; (an) anti-sunburnとする。「96*副社長」はSanのようにa vice-president; an executive vice-presidentとするのが現実的だ。Ken NCが掲げるa vice-president; a vice-CEOでは特に後者が不自然に思える。ちなみにKen Newは単にan executive vice president, the vice president (of a company) だとする。前者はいいが、後者はまだるっこい。すくなくともアメリカの組織では肩書きインフレーションが目立っており、「副社長」に相当する英語の肩書きにはa senior executive/senior vice presidentなどもある。

「97**フリーター」は「岩波国語」と「新明解」だけでなく、新語の採用に慎重だったり、遅れがちな大型辞書 (たとえば「広辞苑」第5版や「大辞林」第2版) にも収められているから、日本語としてすっかり定着したと判断していい。従って、和英辞典の定義も類似している。Sanはa job-hopping part-time workerとしており、Ken NCはこれとまったく同じ表現をまず掲げてから、a person who takes a succession of casual jobs in preference to steady full-time employmentと詳細に定義 (というより、ほとんど解説) する。Ken Newも最初の訳語をまず出してから2つの表現 (a permanent part-timer, a part-timer by choice) を加える。3タイトルのうち、Ken NCだけがこりすぎで、和英辞書には類義語辞典の性格を持たせるほうが便利だから、SanはKen Newよりも不親切だと筆者は判断した。

「112*ラッキョウ」は一見何の問題もなさそうな単語だ。3タイトルともに共通して掲げるのはa scallionである。だが、Sanだけはa shallotも載せている。この表現はCODによるとan onion-like plant, *Allium ascalonicum*, with a cluster of small bulbsであり、竹林滋「新英和大辞典」(研究社、2002年)はCODに似た定義の後に「scallionともいう」と記している。

「119*ロリコン」には3タイトルの間で解釈をめぐる違いが見られる。Sanの訳語 (a Lolita complex) は簡単な、単なる直訳だとみなせるが、「性愛の対象を幼女・少女に求める心理」などとする「新明解」の定義に忠実だ。(「岩波国語」にはこの1語は登場しない。) 同様にKen NCも「心理」だと考えてはいるが、a sexual obsession with young girls; a "Lolita complex"とSanよりは分かりやすい訳語を提供する。この、いわば「心理派」に対して、Ken Newは「奴はロリコン (男) だ」というような言い回しに見られるような「男」説を採用して、a man attracted to young girlsという訳語にしている。さらに「あいつはロリコンだ」という文章の2翻訳例を印刷している (He's into very young girls./He has a thing for very young girls)。ちなみに、CODはLolitaを収めていないが、MWCDは語源 (小説の主人公) にふれた後に、a precociously seductive girlだと定義 (解説) する。

これまでの、ごく簡単な比較・分析によっても、Sanには粗雑な訳語が紛れ込んでいると分かる。Ken NCは「まえがき」が述べている「現代においてあまり使用されなくなった古い語・句・文例などを思い切って削除し、それによって得られたスペースを語彙の追加・充実にあてた」という方針を、かなり大胆に実行したと感ぜられる。Sanに比べると、Ken NC のていねいな編集ぶりが理解できる。Ken Newが充実しているのは大型辞典であるという、その性格から予想できた。しかし、いくつかの見出し語欠如など、利用者の必要を完全に満たす辞書の編集がいかに困難なものであるかを証明している。

日本独自の表現の扱い

和英辞典編集者は日本独自のもの・表現や準日本的なものをどう英訳するか、またどんな英文例を添えて利用者の役に立てるかで、本当の力量を発揮できる。小論はこれまでも、いわゆる日本的なものにいくつか言及してきたが、ここからは「12*大奥」から「107*屋形船」まで、かなり難解ではないかと思われる表現を中心に検討をすすめたい。

「12*大奥」はharemを連想させ、何が本当に「日本的」なものか、他国には全然存在しない100%純粋に「日本的」な制度・現象や事物などがどこまであるものかと考えさせる。たとえば「ゴンドラ」は「市内観光・生活のための舟」だと考えれば、なにもヴェネツィア（ヴェニス）の独占物ではなく、上海の奥にある周荘にも似たような舟があるではないか。両者の間に知名度の差があり、より有名なほうの、元来rock, rollを意味したイタリア語のgondolaが借用語として英語になったただけだ。しかし、ここでは無知に基づく軽率な断定は避けたいと念じつつ、本論に戻る。

Sanは「12*大奥」をthe inner halls of a palaceだとする。この英訳は大奥を「宮廷」とも取れるpalaceの内部だとして城を排除して、単に場所であるという事実だけを強調するから、不満が残る。Ken NCの定義（quarters of the shogun's consort and concubines）は場所ではなく、将軍に仕えるためにそこで寝起きしていた女性たちに重点を置いており、一般の日本人が持つ考えに近くなっている。Ken Newはthe inner palace; the inner rooms of the shogun's palace（where the women of his entourage were housed）と記し、単なる場所としての大奥と将軍のための女性たちがいた大奥を併記する。利用者のなかで多くの学生諸君は多分Ken NCで十分だと感じるだろうが、Ken Newふうにかきたい人も多少はいそうだ。なお、扱い方の差は小型国語辞典にも見られる。「岩波国語」は「（江戸城で）将軍の夫人のいた所。男子の出入を厳しく取り締った」として、Sanに類似する。「新明解」は「①〔江戸城で〕将軍の夫人・側室・女中などの居た所。〔将軍以外、男子禁制であった〕②皇居の奥深い所。宮中」と記述して、5つの辞書のうち、もっとも充実している。

「24家老」はSanではa principal [chief] retainerであり、これを和訳すれば「主な家来」となるから物足りない。Ken NCではa chief retainer (of a feudal lord) ; a minister (of a daimyo) である。Ken Newはa chief counselor (of a shogun) ; a principal [chief] retainer (of a feudal lord) であるとして、もっとも詳しい。

「26*がんばる」は面倒な日本語として有名だ。Sanはhold on [out] を始めとして6つの

表現を、Ken NCはdo one's bestという標準的な表現に始まる9つの英語を掲げる。これだけあれば一応たいていの状況に応じて使えそうだ。これに対してKen Newは7つの表現を印刷した後、なんと41ものフレーズ・英文例を掲げるという徹底したやり方を示す。

会社の合併はおそらく対等なものより上位に立つ側が「吸収」するケースが多いであろう。だから、「31*吸収合併」の訳語としてSanのようにmerger (by absorption); a takeover; acquisitionとするだけでも十分であろう。Ken NCはmergerだけを載せている。Ken Newはmergerをすすめている。珍しくSanのほうが詳しいという事例だ。

「54じゃんけん」は例によって研究社の2タイトルが親切だ。Sanはa finger-flashing game of paper-scissors-stone; a toss; a tossupとしたうえで1つの文例 (Let's decide by a game of 'scissors, paper, stone.') と1つのフレーズ (toss (a coin) for a *thing*) を載せている。Ken NCはthe game of rock, scissors, paper; [英] paper, stone and scissorsだとする。ここまでは両書ともかなり類似しているが、Ken NCでは4行の説明が入り、「日本語の『じゃんけんて決めよう』に相当するのは 'Let's toss (up) for it.' と結んでいる。Ken Newにはthe equivalent of tossing a coin... に始まる6行の解説ふうの「訳語」があり、おまけに2フレーズと2文例を添えて、過剰サービスごみである。

「59新書版」と「99文庫版」では後者が日本的である。だが、岩波茂雄が「読書子に寄す」と題して書いた岩波文庫発刊時の言葉から明らかなように (「吾人は範をかのレクラム文庫にとり,...」), ドイツのReclamという手本があったから、純粋な日本の発明ではない。これら2つの日本語の英訳はSanではa paperback pocket editionと a paperback [pocket edition] (of a hardcover book) である。両者の違いが明らかにならない。Ken NCも不十分な扱いとなっており、「59新書版」を見出し語として採用せず、「99文庫版」は単にa pocket editionとしている。Ken Newはa *shinsho*-size edition; a paperbound pocket edition about 7" x 4" in sizeとa *bunko* editionとしているが、「文庫判」を設けており、a book size slightly smaller than pocket-book sizeなどと記述する。「文庫版」も「新書版」と同様にサイズをインチで説明すれば文体は統一できるが、これでも十分だ。

「65*関脇」をSanはa *Sekiwake* 解説the third highest rank in *sumo*とする。Sekiwakeをイタリック体にするのはいいとして、sumoをもイタリック体とするのは不自然だ。Ken NCはa Sekiwake; a sumo wrestler of the third highest rankとしており、こなれている。Ken Newはていねいにa *sekiwake* wrestler; a (senior-division) sumo wrestler of the third highest rankと英訳し、「幕内」senior divisionまで追加している。

「73単身赴任」がまったく日本だけで見られることかどうか、筆者には疑問が残る。だが、日本で多く見られることであろうと思う。だから、何かが「日本的」であるかどうかは所詮、相対的なことであり、程度の違いだと考えるべきだ。この表現に関してはSanが独自性を見せる。いきなりa commuter marriage; 単身赴任者a business bachelorだとしたうえで、2つのフレーズと1文例を追加している。前者 (commuter marriage) は「ランダムハウス英和」には出てくる語だが、その日本語訳は「別居結婚」だとしたうえで、「米国では、仕事の関係で別居を余儀なくされている夫婦が週末などに共に生活する。その夫婦はcommuter couple」だと解説する。「単身赴任」が先にあり、「別居結婚」が生じるのだから、両者をまったく同じであるとするには無理がある。Sanは「関連語」として扱うべきではなかったか。Ken

NCは「単身赴任する」go to a distant post unaccompanied by one's family; 「単身赴任者」a business bachelorだと記す。Ken Newは4訳例を掲げるが、単純明快で覚えやすいのはan unaccompanied posting; a single transferである。

「81*天守閣」は先に指摘したようにSanには収められていない。Ken NCとKen Newはa castle tower; a keep; a donjonだとする。これら3語のうちdonjonはアメリカの小型辞典には出てこないが、CODはthe great tower or innermost keep of a castleと定義する。ちなみに、「新コンサイス英和辞典」第2版（三省堂、1985年）は「天守閣 [城の]」と和訳している。

「84**土下座する」は時代劇でよく見られるという意味で「日本的」だ。Sanはsit down (prostrate oneself) on the groundとあっさりした扱いを示す。Ken NCはkneel (down) on the ground (as the Shogun's procession goes by) と記述して文化的・歴史的な一面にふれた後、「土下座して非礼を詫げる」bow down on one's hands and knees to beg forgiveness for one's indiscretionという長いフレーズを添える。Ken Newはさらに詳しく、こう教えてくれる。kneel [squat, sit down, prostrate oneself] on the ground; strike the ground with the forehead; kneel (to [before]...) さらに2つのフレーズも追加されている。

「107**屋形船」にもこれまでに見てきたような3タイトルの異なる特徴が現れている。Sanはa houseboat; a barge; a boat with a roofと簡単に処理する。CODはbargeを1 a long flat-bottomed boat for carrying freight on canals, rivers, etc. 2 a long ornamental boat used for pleasure or ceremonyと定義する。（名詞の3と動詞はすべて省略。）文脈によるが、利用者が下手にbargeを「屋形船」のつもりで使うと2ではなく1の意味に誤解されるおそれがあるだろう。多少長いけれども、Ken NCが教えてくれるa roofed pleasure boat with a tatami floor and shojiを選ぶほうが無難であろう。おそらく with a tatami floor以下を省略して使ってもいいだろう。珍しくもKen NewはSanと同じ3語を掲げるにとどめている。

結論

小論は辞書を書評よりも体系的に評価するために、「あらかじめ」選んだ語彙のリストを核にして、辞書の内容を検討することを目的としている。この目的のためのモデルは利用者によりさまざまなものがありえると、すでに述べた。

この作業を通じて、3つの和英辞書のうち学生諸君に薦められるものはどれか、ある程度の考えをまとめることができた。

San = 「グランドコンサイス和英辞典」は広範囲な語彙を必要とし、まれに混入している間違いを指摘できる程度の英語力を持つ学生諸君には推薦できる。三省堂編修所に所属する社員がつくりあげたために欠陥が現れたのであろうと推察できる。価格対効果という観点から判断すると、税抜き7,000円は高すぎる。

Ken NC = 「新和英中辞典」は語彙・見出し語不足を欠点とみなすことはできるだろうが、ていねいな編集が多くの学生諸君に歓迎されるであろう。価格（3,600円）は高過ぎはしない。

Ken New = 「新和英大辞典」（18,000円）は旧版もプロの必須の道具として使われてきたものだし、これ以上に大きい和英辞書はないのだから、厳密な比較は不可能である。学生には「和英中辞典」を家庭や学校で使い、必要に応じて図書館で「大和英」を参照しなさい、と助

言できる。

この拙稿をまとめるのに際して、研究社辞書編集部の上見一好さんと「新和英大辞典」5版の編集委員兼執筆者のガリー（Tom Gally）さんの両氏に貴重な情報・指摘を頂戴した。地味な辞書づくりの仕事に真摯に取り組まれている、お二方に深い感謝の辞を送りたい。